

住まいと火

家の重心

スウェーデンの民家園での一枚の写真がある。

学生時代に旅をした時に撮ったものだ。虚飾のない合理性に惹かれ、幾つかの民家園を訪れていた。大きな暖炉とトップライト。窓が無く暗がりでもトップライトからの光に浮かび上がる白い漆喰の暖炉が神々しく、圧倒され動けなくなった。

火と陽。根元的なるもの。その組み合わせが、その地方の典型的な

松澤 穰

Written by
Minoru Matsuzawa

のかは分

らない。脇

にはベッドが

あり、住ま

いの中心で

あることは

間違いない

のだろう。

まさに家の

重心だ。暖

炉がエアコ

ン、トップライトがシーリングライ

トにどうも変わっても、家の重心は

大切だ。四角い間取りと家具配置

でどうにでもなるとは思えない。

壁一枚で周囲から絶縁するわけで

はなく、方位、周辺環境が影響し、

間取りが決まり、窓やテラスで外

界と呼応する。家の中とはいえ地

続きなのだ。家の居心地には、その

地続きのあり様が無意識に影響

する。街自体もすでにその地続き

の延長線上にある。その大きな視

点からしっかりとズームインし、焦

点を定めていく。

定まった焦点とは何か。それが家

の重心だ。それぞれがいつも座る場

所であり、さりげなく人が集まる

ところ。時にはより象徴的な場所。

家は洋の東西を問わず、重心を集

積させたものなのだと思う。外観



スウェーデンの民家(撮影:松澤 穰)

の印象や、内装の趣向を云々する以前に家の重心をきちつと定めることに費やす時間は惜しまない。

「樗の家」の重心

数年前、別荘を建てた。如何にして穏やかな山容に囲まれた大きなランドスケープの中で居場所を定めるか。

南に開け、北に山を背負う。一本の大きな樗の根元に土地を見つける。家の名前もそこに由来する。偶然ながら風水的にも評価される土地だ。家の居心地が周辺環境から地続きであることを保存しているのが風水なのかもしれないと思った。自然に対し大きく開く。

街中ではなかなかできないことを実践してみたかった。程良い距離に川向こうの山並みが見える。更地の状況で敷地に座り込む。陽の動き、影の変化、風の向き…周辺環境を読み込んで、重心を探す。

暖炉と囲炉裏

重心には、火を置くこと。大きく開いた構えに対して、重心を定めるには、火の力を借りることに

躊躇はなかった。

大学の助手の頃に、新一年生に出題される建築の実技課題の付き添いで、伊豆の田牛にキャンプをした。毎年新たな流木が砂浜にあり、キャンプファイアーの薪には事欠かなかった。一晩中、火のそばでたゆたう炎の動きをながめていた。炎のもたらす時間は、時計の刻み方とは大きく異なる。思いを巡らし、記憶と今が入り交じる。時間とは、時間軸という軸ではないのだといつことに気が付いた。半導体の集積度が増すように建築が変わるとも思えないし、人々の感性が進化するとも思えない。なにやら根源的なものへの憧れは、そういう風に考える性癖にあるようだ。家というのは、まさに日常であり、炎をながめるような時間を受け止めるべきなのだ。

話を戻そう。

大きく分けてふたつ。暖炉と囲炉裏。どちらにするべきか大きく悩んだ。空間的にまとめやすいのは暖炉である。フランク・ロイド・ライトや、吉村順三…名住宅には暖炉がつきものだ。垂直的な煙突は吹抜によく似合う。壁際の暖炉とそれを囲む場。それで確かな重心が生まれる。一方、囲炉裏はどっぴり和風だ。

重心が低く水

平的に広がり、畳の部屋によく似合う。お湯を沸かし、鍋を食す。クックトップの暖炉よりも調理向きだ。何よりも火を介して人が向き合える。燃え方も対照的だ。暖炉で薪が燃える炎は、動きも音もダイナミックだ。一方、煙突による吸引効果のない囲炉裏では、薪の燃え方も穏やかで、並べ方を誤ると消えてしまう。それぞれの触れあわせ方にコツが必要だ。ソーラーシス

テムによる床暖房を併用するので、茅葺きの民家と比較すると気密性ははるかに高い。燻る薪を燃やすわけにはゆかず、囲炉裏を選択すれば、燃料は炭にならざるをえない。浜辺での薪の炎の経験はあっても、炭の火に関しては、無知同然だった。田舎に遊びにいらして、炭火のバーベキューをたしなむ程度。薪に比べ地味で、面白みに欠けるものだと思っていた。



櫛の家(撮影: 浅川 敏)

櫛の家(撮影: 浅川 敏)

そんな中で、福島山奥の民家に泊まった。畳の部屋の土間寄りに囲炉裏が切っており、炭火でポタリ鍋を食べた。小さく、ささやくような小さなパチパチという音、呼吸をするかのように穏やかなリズムで赤く黒く変化する炭火。たとえるならば打ち上げ花火と線香花火。

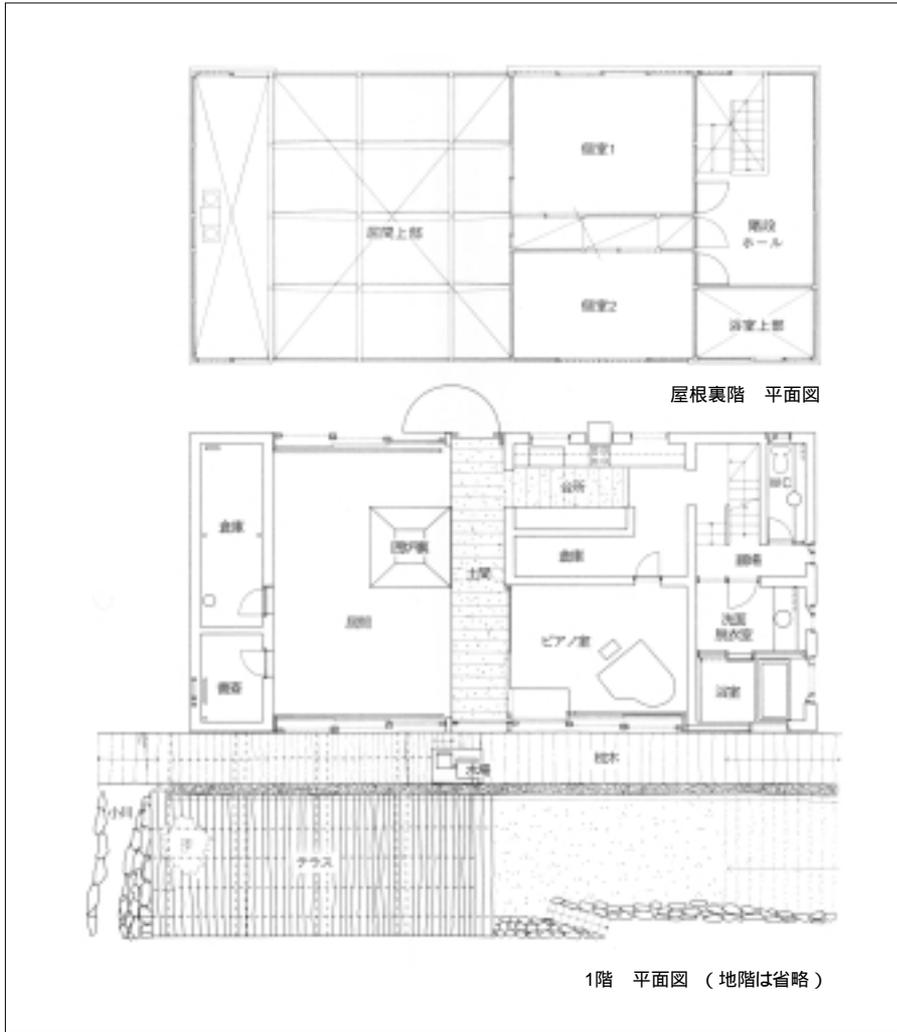
精細な現象に惚れ込んだ。正面に向き合いながらも、伏し目がちで語り合うような柔らかい設えであることも発見できた。
迷いは晴れて、囲炉裏を選択した。南北に開いた水平的な広がり、人々が囲めることを重視して、床に直に囲炉裏を切るのではなく

テーブルで囲んだ。高さ三〇センチメートル、一辺二メートル。人と人との距離感覚は民族性が反映するのだと、昔、本で読んだ。ただ、民家で経験した囲炉裏の大きさでは、あまりに近すぎる。文字通り膝と膝をつき合わす距離。
大きく開いた空間とのプロポー

シオンも反映してこの二メートルの大きさになる。ゆったり九人で四辺を囲める囲炉裏だ。その一辺は土間に接し、土足で立ち姿勢でサーブできる。土間からの視線と床からの視線を揃える高さが床高を決定する。床座、椅子座の混在する日本の住まいの居心地は目線の高さの整理が鍵を握る。さらに下足、上足が室内に混在する。それらを束ねる役目をこの囲炉裏が担っている。

屋根裏階 平面図

1階 平面図 (地階は省略)



樺の家 平面図(コンフォルトNo.39より)

炭焼き釜を買った。三〇リットルの容量だ。四つ割にすれば五本の孟宗竹を炭化でき、買えば高価な竹酢液のおまけ付。水分量の多い初期の煙と、青く澄んだ炭化終了時の煙は全く違う。煙突から出る煙の色を見ながら火力調整を塩梅するのも楽しみの一つだ。こうして簡単にできる竹炭だが、デメリットはすぐに燃え尽きてしまうこと。

炭の魅力に惹かれれば、自ずと消費量も増えてくる。裏山は竹林だ。タケノコを収穫するため、立ち枯れた竹や込み入った部分は間引き、焼却してきた。もったいない。

煮込んでお薦め。イチゴのかたちそのままに、中はトロロとジャムのよう。あつあつのイチゴをアイスクリームにかけていただく。

面倒見が大変だ。火力も強い。熱しやすく冷めやすいのが竹炭の特徴だ。ただ、灰のかけ具合や、床の広がり具合によっては、手なすけることができるかもしれないと試みている。ささやかなゼロエミッションにも手間がかかる。

陽と火

モダンズム以降、人々の住まいの天井への意識が薄らいだ。複数階の建築では、天井はすなわち階上の床だ。

意識を持つとともに、できるのは小さな凹みの間接照明が素材の遊び程度。とはいえ天井はインテリアでの天空なのだ。そこには、輝く陽が欲しい。切り妻屋根の懐はその思いをすっぽり受け止めてくれた。イサムノグチの明かりシリーズの中でもっとも大きい提灯を下げる。直径二一〇センチメートル。五寸勾配でも屋根の容積は驚くほど広い。二メートル角の大テーブルと囲炉裏と大提灯。陽と火。スウェーデンで見た根元要素の出会いを再現した。多くの人に「いくらなんでもかすぎる」と言われた。写真家にも



暖炉模型(撮影:松澤 穰)

不評だった。確かに大きい。たぶんスウェーデンでの経験が、僕を歪めているんだとも思う。

ある日の夕刻、数百メートル先の川の対岸から明かりの付いた我が家を見返した。欄間からはうきりとぞく、その提灯は山間のスケールと呼応してはうかりと浮かんでいた。これでよし。全ては地続きなのだ。

今考えていること

暖炉を前提とした居間をデザインしている。ここでも火と陽の出会いを再現させたいと考えている。

外断熱を施し、杉型枠の表情のしつかり付いた真っ白に塗られたコンクリートの壁と天井が、広い世界を暗示する。真っ黒な暖炉がその世界を規定する。世界の中心だ。灰のかき出し部分、新鮮空気の取り出し等、乗り越えなければならぬ機能上の問題を解決しつつ、フルオーダーの暖炉をデザインする。炎の上昇感を素直に顕わすべく、暖炉を吊り下げようと試みている。床上三〇センチメートル。炎は宙に浮く。床は焦げを気にすることなく、栗材の床が暖炉下に広がる。炎は垂直な煙突を上昇し、天空に空いたトップライトにすいこまれていく。トップライトはスポットライトのように

に暖炉を照らし、床を照らす。火と陽による家の重心がここにある。また、屋外の暖炉もつくりたい。オーストリアの田舎の友人宅で、真夏の夜に野外のテラスで過ごしたひとときの暖炉の心地よさが忘れられない。真夏とはいえ、夜には肌寒く感じる当地の気候、ひんやりした夜風の湿気が爽やかな暖かさに向ち消されて肌をなでる。周囲は暗く炎と星空だけの空間だった。暖炉は決して冬だけではないことを知った。夏の暖炉。使う期間は限られていても、パーベキューと暖炉の中間的な、火床を共有して火種を行き来させられるような設えをテラスの片隅にどうかと考えている。

CEL

松澤 穰(まつざわ・みのる)

建築家、多摩美術大学専任講師。一九六三年東京生まれ。東京芸術大学大学院修了。ウーレン工科大学、ウーレン応用美術大学留学。九〇〜九四年東京芸術大学益子研究室助手を経て、九五年松澤穰+テシコビルネス設立。主な作品は、「樺の家」(一九九六)、「衛の家」(一九九七)、「指揮者の家」(一九九八)、「本の家」(一九九九)、「Stern氏の家」(二〇〇〇)、「日光の家」(二〇〇一)など。